

入梅も近い今日この頃、宮崎県防衛協会青年部会宮崎支部会員の皆様には恙なくお過ごしのこと、心よりお慶びを申し上げます。また昨今は身近な人達から「新型コロナに罹患したけど自覚症状は無かった」等のコメントが寄せられ、3回ワクチン接種の自信とオミクロン株の重症化は少ない等の情報から、皆さん漸く「コロナ慣れ」したかのようです。

しかし未だ自衛隊の営門は堅く閉ざされており各種行事等の案内は届きませんが、先日来日されたバイデン米大統領と岸総理の首脳会談の中で、「防衛費を抜本的に増額する」との発言があったとの報道が有り、さて「GDP1%枠」をどれくらい超えられるのか誠に興味は尽きません。

ロシアによるウクライナ侵攻は「平和ボケ」していた日本人を覚醒させ、憲法九条さえ後生大事に守っていれば二度と戦争は起こらぬものと、「戦争と平和」について真剣に考えようとせず、議論さえしてこなかった人々に冷や水を浴びせ掛けたようです。

非常時の内閣及び岸総理支持率は大きく跳ね上がり、日米同盟強化や拡大抑止防衛論等が大きく報道されても、いつもは直ぐに噛みつく共産党や社民党、そして立民党等も参議院選挙を間近に控える中、異を唱えるリスクは敢えて避けているのかも知れません。

閑話休題、過日宮崎キネマ館で上映中の「潜水艦クルスクの生存者達」を鑑賞して感じたことがあります、その前にあらすじを紹介しますので長文ですがご一読下さい。

この作品は00年8月に実施された大規模演習中の事故を映画化している。北極海での軍事演習に参加したロシア原潜クルスクは、その3日目に起こった魚雷の誤爆により海底に沈没する。ミハイル司令官（マティアス・スーナールツ）以下生き残った23名は、希望を捨てずあらゆる手を尽くしつつ救助を待つ。沈没に気付いた英海軍の准将ラッセル（コリン・ファース）も救助を申し出るが、情報漏洩を恐れる露軍部は一向に許可を出さない。地上で待つミハイルの妻ターニャ（レア・セドゥ）ら乗員の家族たちも軍部に情報を求めるが「異常なし」の返答しかない。そして、艦内はさらなる危機を迎える。

ロシア海軍の威信をかけたクルスクは、分厚いステンレス隔壁でジャンボ機2機分の大きさを誇り核弾頭も搭載可能、ステルス機能を持ち120日間の連続潜航が可能な最新鋭の原潜で、サウナやプール、グラウンドまで備え、演習時には118名の乗員が働いていた。事故の爆発規模は凄まじく、3000度近い熱波が一瞬にして8割の船員を焼き尽くし、ノルウェーなど近隣諸国は海底火山の噴火か地震と誤認するほどだった。

悪天候と機材不足に加え軍部の隠蔽体質により救助活動は進まず、9日目にして漸く内部にアクセス、最終的に艦が引き揚げられたのは3カ月後だった。脚本家のロバート・ロダットは、この時に発見された手記や02年にやっと発表された調査結果をもとにスク립トを書き上げ、主演のスーナールツ経由でヴィンターベア監督の手に渡り映画の製作にこぎ着けた。

監督は単なるパニックものや、ありがちのヒロイズムには流れず、残された妻子や父母たちにも視線を向けた物語にこだわった。「偽りなき者」などを手掛けた監督だけに、子供たちの複雑な表情には唸られる。また、当時の記者会見で軍幹部に詰め寄る女性が、その場で関係者から突然薬剤を注射され、失神したまま運び出される衝撃映像が今もネット上に残っているが、本作ではそれを忠実に再現、家族の絆と共に見事な体制批判を成し遂げた製作陣の勇気には頭が下がる。

当初、事故が発覚してもバカンスを続行したプーチン大統領は、就任から3カ月にもかかわらず支持率が急落した。クルスクは5年間の運用で就いた任務は1回のみ。今も北極海にはソ連・ロシア籍の原潜が3隻、沈んだままになっている。以上

本編は2018年に映画化されて既に4年経過していますが、今が旬のタイムリーな上映時期で有り、ロシアのクリミア侵攻と重ね合わせながら鑑賞すると正にロシアの現状が垣間見えてくるようです。

また知床沖の遊覧船沈没事故とも話題が交錯し、「飽和潜水」や「水中救難艇」など、連日TVニュースで耳にする海難事故の専門用語も映像を通して理解が深まりました。

当時のロシアは財政難から海軍軍備増強までは手が回らず、極東のハバロフスクは原潜の墓場と呼ばれており、その原子炉から漏出する核廃棄物が環境汚染問題化して、日本政府はその処理費用と技術等を一部負担するような報道があった事を記憶しています。

劇中では当時ロシア海軍にあった3隻の潜水艦救難艇のうち1隻は老朽化で稼働せず、別の1隻は沈没したタイタニック号水中観光の為にアメリカの旅行会社に売却したと、ロシア海軍将校が自嘲気味に呟くのが印象的で、そういえば現在「遼寧」と名を変えた中国海軍初の航空母艦も、ウクライナの未完成空母「ワリャーグ」をスクラップ同然で買い叩き、最近完成就役させたことなどが走馬燈のように頭の中を駆け巡った次第です。

現在ウクライナ侵攻中のロシア陸軍も、5月9日の派手な軍事パレードの陰で戦費調達に苦勞している姿が想像され、欧米から最新兵器が届くウクライナ軍に対して苦戦している報道は、本当にフェイクニュースでは無いのかも知れません。

近頃ゼレンスキー大統領の鼻息は荒く、ウクライナ東部地域へ侵攻したロシア軍を国境まで押し戻し、8年前に侵攻されたクリミア半島の奪還まで口にするようになりました。

今の我々に出来ることは直ちに憲法改正を行い、「日本は日本人が守り抜く決意と覚悟」を中国やロシア、そして北朝鮮や韓国に見せつけることかと存じます。

令和4年6月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦